

主題	機械浴ゼロとその先へ
副題	個浴への取組みから見えてきた成果と課題
自立支援	利用者満足

研究期間	5年	事業所	社会福祉法人東京福祉会 特別養護老人ホーム 第2練馬高松園
発表者	木村 紗央里 (きむら さおり)	アドバイザー	
共同研究者：杉原靖、松浦和則、増田左裕里、古舘直樹			

電話	03-5987-2333	メール	dai2@tfk.or.jp
FAX	03-5987-2555	URL	http://www.neritaka2.com

今回発表の事業所やサービスの紹介	平成19年に開設、特養62名、ショートステイ10名のユニット型特別養護老人ホームである。「私たちの願いは、お客様の笑顔、家族の笑顔、職員の笑顔、そして地域の信頼です」を経営理念とし、利用者の方々に「生き生き」「のびのび」と明るく、そして楽しい暮らしの提供を目的として運営している。
------------------	--

### 《1. 研究前の状況と課題》

新規施設の開設にあたって、法人としてユニット型施設が初めてだった事もあり、従来の支援方法について一から見直しを行った。特に入浴については、要介護状態となり施設へ入所すると、他の利用者と一緒に流れ作業のような入浴介助を受けたり、全て機械任せの入浴となってしまうことが少なくない。

介護保険制度の「入所者がその有する能力に応じ自立した日常生活を営むことができるようにすることを目指す」という基本方針に則り、一人ひとりの能力や生活習慣を大事にする支援を行うには、こうした入浴支援方法を見直す必要があった。

そこで、施設の設計の段階から、お一人おひとりが安心して入浴できる環境を整えるために各種工夫をこらすとともに、職員一人ひとりが安全に入浴介助を行える技術を身に付けるためにはどうすればよいか試行錯誤してきた。

### 《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

〈研究の目標〉

- 出来る限り、その人の有する能力を活かした入浴支援を行う。
- 家庭と変わりのない、ゆったりとリラックスした入浴時間を提供する。
- そういった支援を行うための理念と技術を職員一人ひとりが身に付ける。

〈期待する成果〉

要介護状態の軽減または悪化の防止となり、自立した日常生活を送れるようになる。

### 《3. 具体的な取り組みの内容》

開設前に入浴支援に関する検討の結果、各ユニットに家庭的な一人用の浴槽を導入し、一人ずつ入浴を行う方法（以下、個浴という）を原則として入浴支援を行うこととなった。そしてより多くの方に個浴による入浴支援を行うために、次のような取り組みを行った。

## 1. 生活リハビリを取り入れた移乗介助

要介護状態が重度の方でも、その方の残存能力を最大限活用した、負担や恐怖心の少ない移乗介助をおこなうために、身体の仕組みを知り、人間の自然な動きに沿って介助を行う方法を導入し徹底した。

## 2. 入浴支援を軸にした業務の見直し

業務主体による入浴日の固定は行わず、利用者の生活習慣や希望に合わせて柔軟に入浴できるように業務を組み立てた。

## 3. 新任職員に対する指導

入浴は生活習慣の一部であり、日本人にとって欠かせないものであるという事を中心に、自立支援における入浴の重要性を指導した。

## 4. 技術研修・勉強会

重度の方への個浴支援を行うためには、職員の意識啓発と技術の向上が必要であった。そのため外部から講師を招いてセミナーを開いたり、それに参加した職員を中心に内部研修を活発的に行うことによって、全体のレベルアップを図った。

### 《4. 取り組みの結果と考察》

現在、全ての利用者に対し個浴での入浴支援を行い、浴槽を跨ぐ、浴槽の淵に掴まって立つといった動作や洗身洗髪等の行為は、出来る限りご自分で行って頂けるよう支援している。

その結果、平成24年4月現在の入居者で、入所前は機械浴を利用していた方10名のうち入所後要介護度が軽減した方が4名、変わらなかった方が6名であった。こうしたことから、日ごろ行っている自立支援が要介護度の軽減や悪化の防止に繋がっており、個浴は自立した生活を送るきっかけのひとつになっていると考えられる。

また、本研究に際し、入浴支援に関するアンケートを利用者家族に実施した。その結果9割の方が個浴に対して「良い」と感じており、“個浴支援が施設を選び第一条件になった”“最期の時まで入浴を楽しんで欲しいという気持ちでいっぱいです”といった意見が聞かれた。

また、利用者からは“小さいお風呂は初めてだったが、のびのびと入れて良かった”といった声が聞かれた。さらに、福祉サービス第三者評価でも“入浴は自立につながる生活リハビリとしての視点で重視し、一人に30分程度時間を掛けて丁寧に利用者のペースに合わせて支援している”といったことが評価されている。

その他にも職員数の削減や業務時間の短縮につながった。

しかし一方で、個浴での支援と言う形にとられ過ぎたり、介助技術の向上のみが先行し過ぎたこともあり、利用者の好みや習慣を入浴支援に十分に活かされておらず、リラックスして「入りたい」と思える入浴支援が今後の課題として挙げられた。今年度からは入浴委員を中心に、生活における入浴の重要性や利用者の主体性を重視した入浴支援方法についての研修など、職員の意識統一を図る取り組みを行っている。

### 《5. まとめ、結論》

高齢者施設において利用者や家族の多くは家庭的な個浴での入浴を望んでおり、個浴支援への取り組みを行う事で、利用者の自立した日常生活を営むきっかけのひとつになっていることがわかった。その一方で、より満足度の高い入浴支援を行う為には入浴介助の技術だけでなく、入浴支援に対する職員の意識を変えていく必要がある。

### 《6. 提案と発信》

要介護状態になって施設に入所しても、自立した日常生活を営むことが出来るよう支援するために、個浴はとても有効な支援方法であるが、個浴という形や入浴介助の技術だけでなく、本当に入りたいと思えるお風呂にするための職員の意識や関わりが、利用者満足の向上のためには重要である。

### 【メモ欄】